

## 「駿河小判座と日本銀行」

### <要 旨>

わが国初の流通通貨は奈良時代から平安時代前期にかけて発行された皇朝銭（「和同開珎」をはじめ12種類の銅銭）である。12世紀以降は渡来銭（宋銭、明銭）が流通したが、やがて通貨不足となり粗悪な鏹（ビタ）銭が出回るなど混乱が生じた。このため、貨幣制度の確立は天下統一の重要な要素と考えられるようになり、徳川家康公は征夷大將軍となる直前に金貨、銀貨、銅貨からなる三貨制度を導入した。

金貨は大きさ、品質、重さが一定の計数貨幣であり、小判1枚を1両とし、全国に4か所設置された金座（江戸、京都、駿府、佐渡）で作られ、東日本を中心に流通した。銀貨は重さを量って使う秤量貨幣であり、全国に4か所設置された銀座（伏見、駿府、大阪、長崎）で作られ、西日本を中心に流通した。

駿河の金座は、慶長小判等を鑄造していたため「駿河小判座」と呼ばれ、当時の上魚町（現在の日本銀行静岡支店がある金座町）に所在した。「駿河小判座」の御金改役（責任者）であった後藤庄三郎光次は、室町幕府以来京都で御用金匠を務めた後藤宗家の5代目徳乗の高弟で、徳川家康公の覚えが目出度く駿河小判座以外にも経済交易面で広く登用された。「駿河小判座」は僅か5年（1607～1612年）で江戸の金座に統合され光次も江戸に移ったが、家康公と光次の関係を示す貴重な史料等が安西寺（静岡市葵区丸山町）に残されている。

江戸時代の約270年間、財政悪化への対応や貨幣量の調整を目的として、金貨等の改鑄が幾度も行われたが、その多くが金の含有量を引き下げる改鑄であった。このため、小判は江戸初期に重量17.9グラム（金含有率84%）であったものが、江戸末期には同3.3グラム（同57%）となり、米価換算ベースで計算した通貨価値は、江戸初期には1両＝10万円前後であったものが、江戸末期には1両＝8千円強まで下落（約12倍のインフレ）した。

なお、日本銀行が静岡に支店を開設（1943年）したのは、当初「駿河小判座」跡地の金座町ではなく下石町（現在の常磐町）であった。すぐに戦火で焼失し呉服町に移転（1945年）、その後、高度経済成長下の銀行券需要の急拡大等を背景に改築の必要が生じていたところ、幸いにも当時の金座町地権者や行政当局の理解を得て現所在地に移転した。今日、日本銀行静岡支店が「駿河小判座」に由来した金座町という中央銀行に相応しい場所で仕事ができるのは、地元の皆様のご理解・ご協力の賜物である。私どもはこれにお応えすべく、今後とも中央銀行業務を通じて地元経済にしっかり貢献して参りたい。